

県産木質チップ使用に課題

中電碧南火力の混焼試験

粉状化に難点

知事視察 解決へ調査研究実施も

未利用間伐材を発電燃料として活用する県の木質バイオマス事業で、鈴木英敏知事は二十九日、県産木質チップの供給を目指している中部電力碧南火力発電所（愛知県碧南市）を視察した。同発電所での混焼試験で、県産チップは同発電所が現在導入しているカナダ産のチップに比べ、燃料時に粉状にしにくい問題点が明らかになったが、鈴木知事は「何としても実現したい」と述べた。

県と同発電所は今年二月二十九日―三月五日、県産のスギとヒノキを原料とするチップ計五十トを対象に混焼試験を実施。ボイラーに入れるために機械で石炭と混ぜて粉状にしたところ、チップの量を増やすにつれて粉状になりにくい問題点が判明し、最大約三・八立方メートルが機械内に残った。同社によると、カナダ産チップにない樹皮が付いていたことが原因として考えられるというが、特定には至っていない。

研究を新たに実施したいと
した。
宮池副社長は「県産チップを受け入れる可能性がないということではない。技術的課題を解決し、品質や供給量も含めて総合的に相談したい」と話した。
同発電所は平成二十二年九月から、石炭とチップの混焼発電を開始。県は将来的に年間一万吨の供給を目標とし、二十四年度当初予算には原料となる間伐材の搬出体制確立に向けた関連費用約二千六百五十万円を計上しているが、品質や価格、供給量が課題となっている。
（廣瀬秀平）



栗山所長（左）と宮池副社長（右）から説明を受ける
鈴木知事＝愛知県碧南市で

鈴木知事はこの日、同社の宮池克人副社長や同発電所の栗山章所長らと同発電所のチップの受け入れ施設などを見て回り、「何としても林業再生や地域活性化、新エネルギーの観点から県のチップを活用してもらいたい」と要請し、「課題をクリアするために予算を付ける必要があるなら、施策を修正する可能性もゼロではない」と説明。具体的には決まっていないが、必要があればチップの調査